

レタス軟腐病菌による髓部腐敗症状の発生について

11月どりレタスで、結球後期から収穫期にかけて、髓部が緑色水浸状になり、症状が進むとゼリー状に軟化・腐敗し空洞状になる症状が認められ、病変部からは細菌が検出された。この髓部の腐敗症状は、上原ら(1972)により、軟腐病菌による特異的な症状と報告されている。

1. 症状

結球後期から収穫期にかけて地上部は萎凋する(写真1)。地際部の葉は軟化・腐敗するが、菌核病や灰色かび病のようなカビや菌核は認められない。しかし、茎部を切断すると、中心部は緑色水浸状であり、症状が進むとゼリー状に軟化し、さらに褐変し空洞化することもある(写真2)。このような株は引き抜くと地際から容易に折れる。また、結球葉基部の葉脈が一部赤みを帯びている。



写真1 萎凋症状

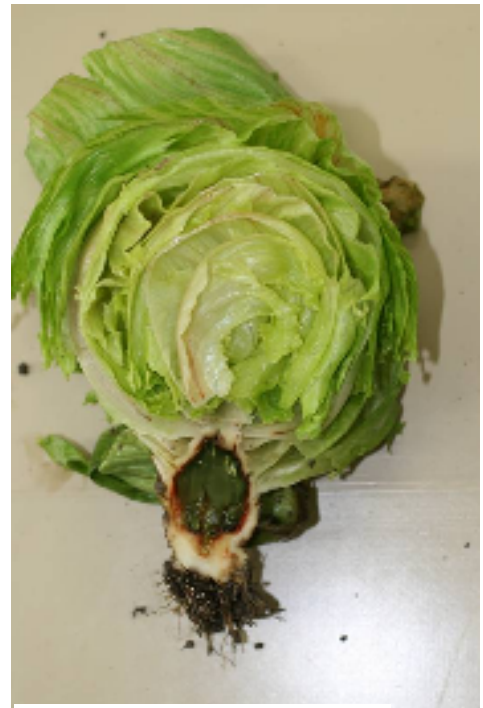


写真2 髓部の軟化症状

2. 発生しやすい条件

上原ら(1972)によれば、年内どりの作型で、10~11月に高温で降雨が多い年に発生が多いと言われている。また、品種間差も大きい。

3. 防除対策

発生しやすい品種はさけるとともに、これまでの軟腐病対策と同様の対策を講じる。

4. 参考文献

上原 等他(1972):軟腐病菌によるレタス茎内部の腐敗症状について, 香川農試研究報告第22号.